

(西暦) 2021年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

高齢者にとっての「通いの場」の意味と支え合いの構造

学位の種類: 修士 (作業療法学)

東京都立大学大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学域

学修番号 20896702

氏名: 岩井英泰

(指導教員名: 小林法一教授)

はじめに

都市化と核家族化により地域のつながりの希薄化が進んだ我が国では、高齢社会を乗り切るために、住民同士の支え合いを強化する地域づくりが推奨されている。その具体策の一つに「通いの場」の普及促進がある。ここで言う通いの場とは、地域住民が気軽に集える場であり、住民同士の支え合いの観点から、運営の主体が企業や自治体ではなく住民であるものを指す。政府は高齢社会施策として、こうした通いの場の拡充を謳っており、2015年にはリハビリテーション専門職（以下、リハ専門職）の通いの場への関与が制度化された。介護予防領域におけるリハ専門職にはコミュニティの対応力の向上への支援が求められ、通いの場の支援においても、住民同士の支え合いの強化が重要である。しかし、通いの場で見られる支え合いに関する報告についてはほとんどが事例報告であり、支え合いの構造を明らかにすることに焦点を当てた研究は筆者が渉猟した限り見当たらなかった。

そこで、本研究の目的を、通いの場に参加することの意味を記述し、高齢者の通いの場での支え合いの構造を明らかにすることとした。

方法

本研究は、高齢者の通いの場においてマイクロエスノグラフィーに基づく参与観察および個別面接を実施し、質的帰納的分析方法にて分析を行う質的研究である。参与観察は月に2~3回程度の頻度で11ヶ月間、合計27回実施した。研究参加者は通いの場に継続的に参加している6名であり、個別面接を2回実施した。

結果

研究参加者は、68歳から78歳の高齢者6名で、全て女性であった。研究参加者の通いの場に参加することの意味は、6つのテーマ【自分のニーズに適った外出先を求めて行き着いた場である】、【安心できる居場所で、生活の一部となっている】、【自由に出入りできる、程よい距離感の仲間がいる場所】、【通い続けるために重要な人とのつながりがある】、【支え合いが生まれ、生活が豊かになる】、【活動や役割が拡大し、今までとは違う生活になる】で構成された。

考察

通いの場には、心の支え、情報を得る、認め合う、参加者同士で面倒をみるなどのソーシャルサポートに類似する支え合いがみられた。また、参加当初は思ってもいなかった、ボランティア活動や仕事の獲得など、参加者たちの活動や役割が拡大し、その活動や役割がまた通うニーズになっていた。さらに手伝うことの喜びや充実感から、近所の方への声かけ、お弁当を届けるなど、近隣住民の支援に発展した支え合いの構造がみられた。